



エッセイ

リオの太陽とアマゾンの樹林

松村 眞

発行日

2010.7.12

(本稿は筆者が1992年にリオで開催された地球サミットに参加したときの記録である)

リオの6月は日本なら晩秋か初冬にあたるが、太陽はほとんど真上にあつて、連日30度以上の猛暑につつまれていた。観光地として有名なコパガバーナやイパネマの海岸では、ビーズのような細かい白い砂が照りつける太陽に熱く焼けていた。浜辺では褐色の若者たちがビーチバレーに興じ、小麦色の娘たちは小さな水着で自慢げに肌を焼いていた。多くの環境保護団体が集まっているフラメンゴ公園からは、右手にシュガーローフ(砂糖パン)と呼ばれるラクビーボールを立てたような巨大な岩塊が見えていた。フラメンゴ公園の背後にはコルコバードの丘があり、その頂上に高さ30メートルのキリスト像がリオの街を見下ろしていた。

リオの街には開発と環境に関する催しに世界中から4~5万人が集まり、異常な熱気に満ちていた。ホテルはどこも満室で、ロビーでは朝から晩までポルトガル語、英語、フランス語、ドイツ語が飛びかっていた。外国人相手の犯罪を防ぐために軍隊まで動員され、機関銃を持った兵隊が街角で警備にあっていた。海岸道路の一部が各国の要人を迎えるための専用道路になり、一般車の通行が禁止されて、要所々々には戦車が配備されていた。現地の人の話では、普段は街の中に大勢いるストリートチルドレンが、一時的に収容施設に隔離されたそうである。おかげで夜でも危険を感じることなく、一人で自由に行動できた。

開発と環境に関する催しは主に3か所で開催されていた。一つは国連が主催する地球環境サミットで、リオセントロの北方に設営された特別会場に180ヶ国の政府関係者が集まっていた。日本からは通産省、外務省、環境庁を中心に約120名が参加していた。それだけに宮沢総理大臣の欠席は、現地の日本人をひどく落胆させた。サミットでは、約1週間が閣僚クラスの一般演説で、最後の2日間は首脳会議と署名にあてられた。一般演説では各国が地球環境についての自国のビジョンと政策を発表し、日本は環境庁長官が環境汚染を克服した経験と技術協力についてスピーチした。

今回のサミットでは、開発と環境に関するリオ宣言とアジェンダ21の採択、気候変動枠組み条約と生物多様性条約の署名、および森林原則声明の採択が行われた。リオ宣言は地球環境を良好な状態に保つための基本原則を規定するもので、前文と27の原則で構成されている。アジェンダ21はリオ宣言の諸原則を実施するための行動プログラムで、

資金、機構、技術移転、自然保護などが含まれている。気候変動枠組条約は二酸化炭素などの温室効果ガスを抑制するための取り決めで、対応策や情報の提供と審査を骨子としている。サミットではリーダーシップの不明確さと、先進国と発展途上国の利害の対立が露呈された面がある。しかし、それでもこれほど多くの国々が地球環境という共通の問題認識にもとづいて、行動計画に合意した点に大きな意義がある。問題の解決にはまだほど遠いけれど、このサミットでほとんどの国が同じスタートラインに立ったのであって、今後の具体的な取り組みとフォローアップが重要であろう。

サミットと並行して、市民団体による環境フォーラムがフラミンゴ公園で開催された。海岸に沿った幅が300メートル程度、長さが2キロメートルぐらいの細長い公園には、約400の展示ブースと35張りの大型テントが樹木の間に設置されていた。各ブースには、それぞれの活動を紹介するパネルが展示され、パンフレットが配られていた。内容からみると森林や動植物の保全を目的とする団体が最も多く、ボランティアと思われる参加者が熱っぽく自然保護の重要性を訴えていた。次いで多いのが教育団体で、アメリカ、カナダ、ヨーロッパからの参加者が多かった。たしかに地球環境問題の改善には、自分の生活と地球環境との関連性や、必要以上の消費を抑制する価値観の教育が有益であろう。おもしろい事に宗教団体の参加が目立っていた。彼らの趣旨は、地球環境のために物欲を克服して心の満足を重視しようというもので、それなりの説得力があった。

ブースの間に点在する大型テントでは、大気や水質の公害問題、廃棄物問題、自然環境問題、人種差別問題、女性問題などが熱心に討議されていた。冷房がないテントの中は蒸し風呂のような暑さで、それでも各国の参加者が汗をふきながら通訳を交えて討議していた。比較的大きめのテントの一つには、横に“JAPAN PEOPLES CENTER”と書かれていて、日本人が大勢集まっていた。このテントでは“日本は環境問題でモデルになり得るか”というテーマの討論があり、興味があったので聞いてみた。はじめにタイとマレーシアの参加者が日系企業は工場進出によって公害を輸出していると主張し、日本側は具体例で現地企業以上に環境規制をきちんと遵守していると反論した。すると規制を遵守するのは最低限の対応であって最善策ではなく、それ以上にどの程度の対策を講じるかで企業のモラルが問われるのであり、日本企業にモラルがあるのかという反論が出された。発言者に偏見があるのかもしれないが、日本側も法規制を守ればそれでよしというわけにはいかない厳しさを感じた。この環境フォーラムに経団連や生協などもブースを確保し、日本の環境対策や資源リサイクル活動をパネルで紹介していた。

リオでの地球サミットや環境フォーラムと同時に、サンパウロでは産業界が中心の環境技術博覧会が開催されていた。日本からは10社ほどの大手企業と、石油産業活性化センターなどの業界団体、それにサンパウロと姉妹都市になっている大阪市が出展してい

た。大阪市のパネル展示は下水汚泥の溶融炉で、集まった人たちに溶融スラグでできた砂時計を配っていた。

ブラジル滞在中に3日ほどリオやサンパウロから離れて、アマゾンの中心都市であるマナウスを訪れた。マナウスはアマゾン川の河口から約2000キロメートル遡った場所にあるのだが、川幅がまだ10キロメートルもあって対岸が見えない。このため川というよりも、むしろ淡水の海と思った方がよいだろう。沖合では大きな川イルカが跳ねていた。川岸には大きな港があり、税関や魚市場が連なっている。港に続くバスターミナルの周りには、銀行や商店が集中していた。マナウスは100年ぐらい前に天然ゴムの集散地として栄えていたので、石造りの立派な家が多く、オペラハウスまであった。今の産業は主に家庭電化製品で、東芝やパナソニックの工場があり、街にも電気製品店が多い。

マナウスの栈橋から船に乗ってアマゾンの支流をクルージングしたが、船が進むのにつれて焼畑の跡やインディオの住宅が現れて興味深かった。ここは雨季と乾季で水位が数メートルも違うので、インディオの家はすべて高床式になっている。船が近づくとその箱のような家から、子供から老人まで家族全員が並んで手を振ってくれた。インディオたちは100年前とほとんど同じ生活をしており、文明の恩恵はあまり受けていないかもしれない。しかし自然に恵まれた子供たちの顔は明るく、眼がきらきら輝いていた。小さな支流には樹木に覆われた場所もあり、こぼれ日が川面にまだら模様を作っていた。頭上30メートルぐらいの木々の枝には鳥の巣がたくさんあり、そのまわりを見たことのない鳥たちが飛び回っていた。川には体長が1メートルを超えるピラルクーという淡水魚がいて、肉は食用に、硬いうろこは装飾品に利用されている。インディオの土産物屋で買った人形の腰みのにも使われていた。クルージングの途中で手漕ぎボートに移り、ピラニアを釣らせてくれた。餌には牛肉を使い、魚を針からはずすのは現地のガイドさんの仕事だった。歯が鋭く獰猛なので、素人が魚にさわると怪我をすることがあるらしい。ピラニアは餌だけとるのがうまく、ステーキにできそうな赤身の牛肉がもったいない気がした。釣ったピラニアは船に戻って唐揚げにして食べたが、白身で臭みがなく淡泊な味だった。

ここは車より船の方が重要な輸送手段なので、見た目は陸上と全く変わらないガソリンスタンドが川に浮かび、大小の船に給油していた。マナウスはアマゾンの流通の拠点になっているので、多くの支流の町との間に長距離船が運行されている。数日から1週間以上の船旅になるので、お客はハンモックを持参して専用のフックに掛け、自分の寝場所を確保するようになっていた。こんなアマゾンの街マナウスにもロスアンゼルスから定期便がでており、立派なホテルが整備されている。あまりにも日本や先進国と違うので、強く印象に残る旅だった。 (おわり)